

2014年度湘南藤沢学会「シンポジウム・研究ネットワークミーティング基金」成果報告書

European Conference on Pattern Language of Programs における論文「Towards a Pattern Language for Cooking: A Generative Approach to Cooking」の発表及び向上

71140514
環境情報学部4年
伊作太一

1. 活動日程・会場

7/9 - 7/13 ドイツ連邦共和国 バイエルン州・Kloster Irsee

2. 活動の目的

本研究は「料理」の新しい捉え方と手法となる「ジェネレイティブ・クッキング」の理論を確立し、一般的に難しいとされている「料理」という人間の創造活動を、日常レベルで支援することを目指している。今回の活動では、「ジェネレイティブ・クッキング」の理論とそれを用いて作成したパターン・ランゲージと呼ばれるツールを作成し、その成果をまとめた論文をドイツで開催された国際学会European Conference on Pattern Language of Programs (Euro PLoP)で発表し、そこで得たフィードバックをもとにさらに向上させることを目的とした。

3. 活動の成果

今回の活動を通して得られた成果として、主に2つ、あげられる。それは発表のフィードバックを通じた研究の更なる改善や向上と、「ジェネレイティブ・クッキング」のアイデアの流布と人脈作りによる発展の可能性の開拓である。これらについて、詳細に説明する。

まず今回の学会活動を通して得られたものとして、論文や研究内容へのフィードバックがあげられる。Euro PLoPは世界中からパターン・ランゲージの専門家が集う学会である。パターン・ランゲージの理論や実践を専門に研究している人は世界の中でも少ないので、彼らが一堂に会するこの学会は、とても貴重な場であった。さらに本学会における発表のプロセスは従来の学会とは違い、より有益なフィードバックを得られる仕組みになっていたことも重要な点である。今回経たそのプロセスは、次のとおりである。まず論文の採択の後に、「シェパード」と呼ばれる論文やパターン・ランゲージのエキスパートが各著者に割り当てられ、学会までに論文のリバイズを共に行った。このシェパードから論文やパターン・ランゲージの内容についてコメントをもらい、それをもとに論文を修正していくプロセスを5ヶ月間に渡って合計3回繰り返した。このプロセスを経た後に、学会当日にはこの論文を「ライターズ・ワークショップ」と呼ばれる形式で発表した。ここでは、一論文あたり1時間ほどかけて、「より良いものを共につくっていく」という思想のもと、参加者全員でその内容についてコメントをしてもらった。

このプロセスを通して、「ジェネレイティブ・クッキング」の論文や理論を少しでもよくするために、よい点や改善点などについての建設的なフィードバックが丁寧に行われた。従来のプレゼンテーションとは違い、各論文ともじっくりと時間を割いて検討するため、より深く本質的な部分に関する議論が行われた。参加者は皆、パターン・ランゲージに関する知識を有しつつも、そ

それぞれ異なった研究や文化のバックグラウンドを持っているため、日本では得られないような広い見解を見ることができ、有益な場であった。そして学会を終えた現在、ライターズ・ワークショップでもらったフィードバックを元に、学会誌での論文の発行に向け更なる改善を行っている段階である。

学会活動を通して得られたもう一つの成果は、研究の発信と人脈づくりである。本研究は、本研究は「料理」の手法を捉える新たな枠組みを確立するより大きな試みの一部である。料理を行う人は多くの経験知を感覚的に有しているが、これを言語化して記述するのは大変難しく、正確な分量や調理時間での記述する「レシピ」の限界も知られている。暗黙知の記述・共有を支援するパターン・ランゲージはこの分野において大きな役割を果たすと信じ、今回の学会参加に至った。そのためには、より多くの人に、料理のパターン・ランゲージについて知ってもらい、それを使用してもらわなければならない。今回学会に参加し、料理のパターン・ランゲージについてのアイデアを発表することは、その大きなはじめの一歩となった。通常は、主にソフトウェアデザインや教育の分野で使われるパターンランゲージの手法を、より日常的な料理という分野に応用するというアイデアは斬新で、パターン・ランゲージの理論の発展を願う人や、単純に料理に興味がある人など、学会参加者の多くが研究内容に賛同してくれた。その人達との長期的な研究仲間としてのつながりをつくれたことによって、今後の研究の発展に活かすことができると信じている。この学会には来年以降も参加をし、そこにあるコミュニティとの繋がりを大切にしていきたいと考えている。

4. 今後の発展

現在、この料理のパターン・ランゲージの研究はさらなる発展を遂げ、別の展開を迎えている。学会での発表や参加者との議論をつうじて、「ジェネレイティブ・クッキング」だけでは人間の創造的な料理活動を完全に支援することは難しいという結論に至った。つまり、人間と食材が総合作用を起こす料理のプロセスにおいて、「ジェネレイティブ・クッキング」は食材側の発見や問題解決を支援しているが、それを行う人間の側に起こる心理や思考の問題については支援できていないのである。これを受け、より人間側に注目したパターン・ランゲージの制作が必要だと考えた。現在は「コークッキング」という、複数人で料理するという概念を掲げ、人びとがより日常的に、カジュアルに創造的な料理を楽しめるようなしくみをデザインしている。コークッキングを行うためのパターン・ランゲージやワークショップなどの制作を通して、「ジェネレイティブ・クッキング」との両輪によって、より包括的に創造的な料理のプロセスの支援できるように研究を続けていきたい。